

3月のソウル行きのフライトはキャンセルせざるを得なかった。行けなくなった代わりに、展示やステートメントの打ち合わせは、オンライン上で行われ、高画質の画像がメールに送られてきた。だが画像で見える範囲は、かなり限られている。そのせいもあり、あるときは映像通話越しに、やれ右へやれ左へと言いながら展示を鑑賞し、またあるときは、伝わりきらない質感や触感について、言葉で答えを求めた。少なくとも私にとって、そのような意思疎通の仕方は、行けなくなった「代わり」となれた——ここまで、実際に「あった」私の物語である。だとすば、「ありえたかもしれない」物語はどう描けるのか。

「ありえたかもしれない」と誰かが言う際に、既に選択肢として含まれていたものが当てはまるだろう。後悔や見誤った判断のように、無数の物語は既に条件付けられている。「物語」という言い回しもそうだろう。それはある種のシナリオで、既に路線が固められ、個々の要素が結び付けられた結果である。そうして、物語は一つの結露として生まれるが、そこには除外されたもの、目を向けられなかったものが常にその背後へつきまとっている。本展『Alter-narratives-ありえたかもしれない物語-』のコンセプトにある「無数の物語」という表現は、そのような点で単語同士相容れない関係である。物語にならない・なっていないもの

——断片、記述・発話されないもの、予想の外で起きる「ありえない」出来事——まで含めた無数の可能性は、特定の物語だけでなく、物語という形式からも除外されている。よって、無数の物語は、無数の／物語という断絶を含めた関係に置かれることとなる。では「無数の／物語」の関係は、その断絶の内に留まってしまうのだろうか。

オンラインにおける展示は、なにも本展に限ったものではない。仮想空間に現実をインポートすることは、美術展に限ったことでもなければ、今に始まったことでもない。そのようなインポートの仕方によって、「ありえたかもしれない展示」も「ありえてしまう」場合が、多々ある。ステートメントのページと作品の画像がアップされ、細部まで作品を見ることができ環境は、背後へ退いた無数の／物語を明らかにする場ではなく、現実の可能性を移送したものに過ぎない。展示会場でお披露目されるはずだった作品は、本展の場合も同様に、オンラインという環境で無事に開催された。しかし、この「無事」という表現は、果たしてどうだろう。展示を取りやめる可能性、アーティスト側がオンラインでの展示を拒否した可能性、オンラインでの様々な見せ方など、結果に辿り着くまでに、無数の／物語があった（はずである）。今回オンラインで開催された結果の背後には、「ありえる」という可能性の前に「あった（の）

かもしれない」まま、退いた無数の／物語が姿を隠している。

そもそも、オンラインは、現実の写しと言い難い。多くの美術館が始めたオンライン上の取り組みは、絵具の厚み、彫刻像を観る多視点はおろか、人混みや病原体に感染する可能性を欠如したまま、反映されたものだ。オンラインの展示は、厳密に言うと、現実と同質の鑑賞体験を提供する訳ではない。むしろ、諸感覚や諸出来事が削がれたシャープな結果である。本展も同様に、オンラインで展示が無事開催された。しかし、今目の前で見ているこの展示が、紙面という媒体で実現されたり、アーティストや企画側のボイコットによって開催されえなかったり、いちユーザーのネット通信環境によって見られなかったりすることだって、実はありえたのである。つまり「無事」ではなく「無数」の要素が背後に存在し、その結露となったものの一つに過ぎない。ありえた物語とありえない物語を区別することと、その物語に汲み取られなかったものを思い描くこと、それは、オンラインが現実とは異なる場として立ちあらわれる際に、私たちが振り返るべきポイント＝分岐点となる——なぜなら、私たちは作品ではなく、モニター越しの作品を観ているのだから。

しかし分岐点は、一度通り過ぎてしまうと、なかなか立ち返ることはできない。

というのも、オンライン展示を鑑賞しながら、「こうなっていたかもしれない」展示を、物理空間に思い描くだけで精一杯で、それで良しとしてしまうからだ。更にいうと、それは、展示とかわるものによって描かれる物語に過ぎない。その物語に、亀が路上を歩いていた事実や、明日の天気予報、自販機でとり忘れたお釣りは、かわることはない。しかしながら、展示という物語に介入できなかった無数の要素は、オンライン展示の環境で、かわることだってできるのではないか。コンセプトにも登場する「再編」の意味について、こう考えることもできる。つまり、無数の要素とかわりを持ちながら、物語を綴るだけでなく、物語になっていないものを明らかにし、物語の外から既存の物語を崩し、外の要素を編入させるアプローチである。ある物語をそっくりそのまま「写し」たり、ある物語がそのまま「映る」のではなく、「うつろう」ものへと仕立てる可能性。それこそが、「無数の／物語」から展開できる可能性と言えよう。これは美術作品だけでなく、オンラインという環境が秘めている可能性でもある。それは漸次的な「展開」ではなく、無数の要素とかわり「後ずさりする」ことで、物語を仕立ててゆく（再編する）態度と言えよう。そうすることで無数と物語は、両者の断絶（／）からより解き放たれるだろう。